

平成 30 年度高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する
支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果
(岩手県の状況)

令和元年 12 月

保健福祉部長寿社会課

調査の概要	1
-------	---

調査結果

1 養介護施設従事者等による高齢者虐待の対応状況等について	3
-------------------------------	---

- (1) 相談・通報件数
- (2) 相談・通報者
- (3) 事実確認の状況及び結果
- (4) 虐待事例の概要
- (5) 虐待事例への対応
- (6) 被虐待高齢者の状況
- (7) 虐待の種別・類型
- (8) 虐待者の状況

2 養護者による高齢者虐待の対応状況等について	9
-------------------------	---

- (1) 相談・通報件数
- (2) 相談・通報者
- (3) 事実確認の状況及び結果
- (4) 事実確認調査の結果
- (5) 虐待の種別・類型
- (6) 被虐待高齢者の状況
- (7) 虐待への対応策
- (8) 調査対象年度末日での状況

3 虐待等による死亡事例の状況について	17
---------------------	----

4 市町村における高齢者虐待防止に関する体制整備等の状況について	17
----------------------------------	----

調査の概要

【調査の目的】

平成 30 年度における養護者及び養介護施設従事者等による高齢者虐待への対応状況等を把握することにより、より効果的な施策の検討を行うための基礎資料を得ることを目的とする。

【調査方法】

「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査」（令和元年5月24日付け厚生労働省老健局高齢者支援課通知）に基づき、県内 33 市町村に平成 30 年度中に新たに相談・通報があった高齢者虐待に関する事例及び平成 30 年度以前に相談・通報があり、平成 30 年度において事実確認や対応を行った事例について調査を行った。

【関係法令等】

(1) 高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律（平成 18 年 4 月 1 日施行）

第 25 条 都道府県知事は、毎年度、養介護施設従事者等による高齢者虐待の状況、養介護施設従事者等による高齢者虐待があった場合にとった措置その他厚生労働省令で定める事項を公表するものとする。

(2) 用語の定義

- ・「高齢者虐待」とは、①身体的虐待、②介護・世話の放棄・放任（ネグレクト）、③心理的虐待、④性的虐待、⑤経済的虐待をいう。
- ・「養護者」とは、高齢者を現に養護する者で養介護施設従事者等以外の者をいう。
- ・「養介護施設従事者等」とは、養介護施設（特別養護老人ホーム等）又は養介護事業（居宅介護支援事業所等）の業務に従事する者をいう。

【用語解説】

1 身体的虐待

高齢者の身体に外傷が生じ、又は生じるおそれのある暴行を加えること。

（殴る、蹴る、ベッドに縛るなど）

2 介護等の放棄（ネグレクト）

高齢者を衰弱させるような著しい減食又は長時間の放置、養護者以外の同居人による身体的虐待、心理的虐待、性的虐待又は介護等の放棄に掲げる行為と同様の行為の放置等養護を著しく怠ること。

（入浴させない、食事を与えない、必要な介護サービス等を受けさせないなど）

3 心理的虐待

高齢者に対する著しい暴言又は著しく拒絶的な対応その他の高齢者に著しい心理的外傷を与える言動を行うこと。

（怒鳴る、人前で恥をかかせる、無視するなど）

4 性的虐待

高齢者にわいせつな行為をすること又は高齢者をしてわいせつな行為をさせること。

（わいせつな行為の強要、懲罰的に裸で放置するなど）

5 経済的虐待

養護者又は高齢者の親族が当該高齢者の財産を不当に処分することその他当該高齢者から不当に財産上の利益を得ること。

(生活費を渡さない、勝手に年金や財産を使うなど)

【留意事項】

構成割合(%)は四捨五入しているため、内訳の合計が100%に合わない場合がある。

調 査 結 果

1 養介護施設従事者等による高齢者虐待の対応状況等について

(1) 相談・通報件数（表 1）

平成 30 年度、県及び市町村で受け付けた養介護施設従事者等による高齢者虐待に関する相談・通報件数は 16 件であった。（29 年度は 12 件）

表 1 相談・通報件数

	平成 30 年度	平成 29 年度	増 減
市町村が受理した件数	16 件	11 件	5 件
県が受理した件数	0 件	1 件	△1 件
合計	16 件	12 件	4 件

(2) 相談・通報者（表 2）

「当該施設職員」及び「家族・親族」が各 6 件、「施設・事業所の管理者」が 4 件、「介護支援専門員」が 3 件であった。

表 2 相談・通報者（複数回答）

件	本人による届出	家族・親族	当該施設職員	当該施設元職員	施設・事業所の管理者	医療機関従事者(医師含む)	介護支援専門員	介護相談員	地域包括支援センター	県から連絡	警察	その他	合計
	0	6	6	1	4	1	3	1	2	2	0	2	28

(3) 事実確認の状況及び結果（表 3）

ア 事実確認の実施状況

相談・通報件数 17 件（平成 30 年度に受け付けた 16 件及び平成 30 年度以前に受け付け、事実確認が平成 30 年度となった 1 件）のうち 15 件で事実確認調査を行った。

表 3 事実確認の実施状況

事実確認の状況		件 数	構成割合(%)
事実確認調査を行った事例		15	88.2
	事実が認められた	5	[29.4]
	事実が認められなかった	5	[29.4]
	判断に至らなかった	5	[29.4]
事実確認調査を行っていない事例		2	11.8
	虐待ではなく調査不要と判断した	0	
	調査を予定している又は検討中の事例	0	
	都道府県へ調査を依頼	0	
	その他	2	[11.8]
合 計		17	100.0

イ 市町村から都道府県への報告状況（表4）

事実確認調査を行った15件のうち「都道府県と共同して事実確認を行う必要がある事例」は1件であった。

表4 県への報告状況

市町村から都道府県への報告状況		件数
都道府県と共同して事実確認を行う必要がある事例		1
市町村で調査を行ったが虐待の事実の判断に至らず、都道府県に調査を依頼*		1
市町村単独で事実確認調査ができず、都道府県に調査を依頼		0

※市町村と都道府県が共同で事実確認を行った結果、虐待の事実が認められた。

ウ 虐待の事実が認められた事例件数

虐待の事実が認められた事例は6件であり（表3で事実が認められた5件及び表4で県に調査を依頼した結果事実が認められた1件）、全て市町村から都道府県へ報告があった。

(4) 虐待事例の概要

ア 虐待があった施設・事業所のサービス種別（表5）

虐待があったのは、特別養護老人ホーム、養護老人ホーム、短期入所施設、訪問介護事業所であった。

表5 サービス種別

	特別養護老人ホーム	介護老人保健施設	認知症対応型共同生活介護	（住宅型）有料老人ホーム	養護老人ホーム	短期入所施設	訪問介護等	通所介護等	居宅介護支援等	合計
件数	2	0	0	0	1	2	1	0	0	6
構成割合(%)	33.3	0.0	0.0	0.0	16.7	33.3	16.7	0.0	0.0	100.0

イ 虐待対応ケース会議での発生要因の分析

表6 発生要因（複数回答）※単位：件

運営法人（経営層）の課題	経営層の倫理観・理念の欠如	2
	経営層の虐待や身体拘束に関する知識不足	4
	経営層の現場の実態の理解不足	4
	業務環境変化への対応取組が不十分	3
	不安定な経営状態	1
	その他（内容：経営者兼管理者が介護保険制度について無理解）	1
組織運営上の課題	介護方針の不適切さ	2
	高齢者へのアセスメントが不十分	4
	チームケア体制・連携体制が不十分	5
	虐待防止や身体拘束廃止に向けた取組が不十分	2
	事故や苦情対応の体制が不十分	2
	開かれた施設・事業所運営がなされていない	3
	業務負担軽減に向けた取組が不十分	3
	職員の指導管理体制が不十分	5
	職員研修の機会や体制が不十分	5
	職員同士の関係・コミュニケーションが取りにくい	3
	職員が相談できる体制が不十分	5
	その他	1

虐待を行った職員の課題	職員の倫理観・理念の欠如	5
	職員の虐待や権利擁護、身体拘束に関する知識・意識の不足	4
	職員の高齢者介護や認知症ケア等に関する知識・技術不足	2
	職員の業務負担の大きさ	3
	職員のストレス・感情コントロール	5
	職員の性格や資質の問題	5
	待遇への不満	2
	その他（内容：虐待者が管理者であり、相互牽制が働かなかった。）	1
被虐待高齢者の状況	介護に手が掛かる、排泄や呼び出しが頻回	3
	認知症によるBPSD（行動・心理症状）がある	2
	医療依存度が高い	0
	意思表示が困難	1
	職員に暴力・暴言を行う	0
	他の利用者とのトラブルが多い	0
	その他（軽度の知的障害、管理者から日常的に暴言を受けていた。）	2

ウ 事実確認時における当該施設の虐待防止に関する取組み（表7）

管理者及び職員に対する虐待防止に関する研修が各3件、虐待防止委員会の設置が1件であった。

表7 当該施設の虐待防止に関する取組み（複数回答）

	件数
管理者の虐待防止に関する研修の受講あり	3
職員に対する虐待防止に関する研修の実施あり	3
虐待防止委員会の設置あり	1

エ 被虐待者・虐待者の特定（表8）

虐待事例 6 件のうち4件で被虐待者・虐待者共に特定できており、2件で虐待者は特定できている。
（※虐待者及び被虐待者が複数の事例があり、不特定多数の場合、一部でも特定できている場合を含む。）

表8 被虐待者・虐待者の特定

	件数
被虐待者・虐待者共に特定できている	4
被虐待者は特定できている	0
虐待者は特定できている	2
共に不明	0

(5) 虐待事例への対応（※平成30年度に認定された6件及び対応が平成30年度となった2件について）

ア 老人福祉法、介護保険法上の権限行使以外の対応（表9）

表9 具体的な対応（複数回答）

	市町村が実施（件数）	都道府県が実施（件数）
施設等に対する指導	7	7
改善計画提出依頼	6	3
従事者等への注意・指導	6	6

イ 介護保険法の規定に基づく権限の行使

介護保険法の規定による権限の行使（報告徴収、立入検査、指定取消等）として実施したものは0件であった。

ウ 老人福祉法の規定に基づく権限の行使

老人福祉法の規定による権限の行使（報告徴収・質問・立入検査、改善命令等）として実施したものは、報告徴収・質問・立入検査が1件、改善命令が1件であった。

エ 市町村・都道府県の対応に対して当該施設で行われた措置（表10）

虐待事案のあった施設の措置は、「改善計画の提出」が8件であった。

表10 措置（複数回答）

	件数
施設等からの改善計画の提出	8
老人福祉法、介護保険法の規定に基づく勧告・命令等への対応	0
その他	0

オ 改善取組のモニタリング（表11）

施設訪問による確認が4件、施設からの報告が4件であった。

表11 モニタリング

	件数
施設訪問による確認	4
施設からの報告	4

カ 調査対象年度末日での状況（表12）

表12 平成30年度末日の状況

	対応継続	終結	計
件数	2	6	8
構成割合（%）	25.0	75.0	100.0

(6) 被虐待高齢者の状況

ア 性別（表13）

被虐待高齢者は男性4人、女性13人であった。

表13 性別（1件の事例に複数の虐待者がいる場合を含む。）

	男	女	合計
人数	4	13	17
構成割合（%）	23.5	76.5	100.0

イ 年齢階級（表14）

被虐待高齢者の年齢階級は、「85～89歳」が6人、「90～94歳」及び「80～84歳」が各3人、「95歳以上」及び「75～79歳」が各2人、70～74歳が1人であった。

表14 年齢階級

	70歳未満	70～74歳	75～79歳	80～84歳	85～89歳	90～94歳	95歳以上	合計
人数	0	1	2	3	6	3	2	17
構成割合（%）	0.0	5.9	11.8	17.6	35.3	17.6	11.8	100.0

ウ 要介護度及び日常生活自立度（認知症・障害）（表 15～17）

被虐待者の要介護度は要介護 3 以上が 6 人、認知症日常生活自立度は自立度Ⅱ以上が 6 人であった。

表 15 要介護認定者の要介護度

	人数	構成割合 (%)
自立	8	47.1
要支援1	0	0.0
要支援2	0	0.0
要介護1	1	5.9
要介護2	2	11.8
要介護3	2	11.8
要介護4	3	17.6
要介護5	1	5.9
不明	0	0.0
計	17	100.0

表 16 認知症日常生活自立度

	人数	構成割合 (%)
自立又は認知症なし	2	11.8
自立度Ⅰ	8	47.1
自立度Ⅱ	3	17.6
自立度Ⅲ	3	17.6
自立度Ⅳ	0	0.0
自立度M	0	0.0
認知症はあるが自立度不明	0	0.0
認知症の有無が不明	1	5.9
計	17	100.0
自立度Ⅱ以上（※）	6	35.3

※自立度Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、M、認知症はあるが自立度不明の人数の合計

【参考】認知症高齢者の日常生活自立度

自立度Ⅰ：何らかの認知症を有するが、日常生活は家庭内及び社会的にほぼ自立している。

自立度Ⅱ：日常生活に支障を来すような症状・行動や意思疎通の困難さが多少見られても、誰かが注意していれば自立できる。

自立度Ⅲ：日常生活に支障を来すような症状・行動や意思疎通の困難さが見られ、介護を必要とする。

自立度Ⅳ：日常生活に支障を来すような症状・行動や意思疎通の困難さが頻繁に見られ、常に介護を必要とする。

自立度M：著しい精神症状や周辺症状あるいは重篤な身体疾患が見られ、専門医療を必要とする。

表 17 障害高齢者の日常生活自立度（寝たきり度）

ランク	人数	構成割合 (%)
自立	3	17.6
J	2	11.8
A	4	23.5
B	6	35.3
C	1	5.9
不明	1	5.9
計	17	100.0

【参考】障害高齢者の日常生活自立度（寝たきり度）

[生活自立]ランクJ：何らかの障害を有するが、日常生活はほぼ自立しており自力で外出する

1. 交通機関等を利用して外出する
2. 隣近所へなら外出する

[準寝たきり]ランクA：屋外での生活は概ね自立しているが、介護なしには外出しない

1. 介助により外出し、日中はほとんどベッドから離れて生活する
2. 外出の頻度が少なく、日中も寝たり起きたりの生活をしている

[寝たきり] ランクB・・・屋内での生活は何らかの介助を要し、日中もベッドの上での生活が主体であるが、座位を保つ

1. 車いすに移乗し、食事、排せつはベッドから離れて行う
2. 介助により車椅子に移乗する

[寝たきり] ランクC・・・1日中ベッド上で過ごし、排せつ、食事、着替において介助を要する

1. 自力で寝返りをうつ
2. 自力では寝返りもうてない

(7) 虐待の種別・類型（表 18）

ア 虐待の種別・類型

虐待の種別では、経済的虐待が最も多く 15 人であり、次いで心理的虐待が 2 人、身体的虐待が 1 人であった。また虐待に該当する身体拘束は 0 人であった。

表 18 虐待の種別（複数回答）

	身体的虐待	介護等放棄	心理的虐待	性的虐待	経済的虐待	合計（累計）	被虐待高齢者数	虐待に該当する身体拘束
人数	1	0	2	0	15	18	17	0
構成割合 (%)	5.9	0.0	11.8	0.0	88.2	-	-	0.0

(※) 構成割合は、被虐待高齢者数に対するもの。

イ 虐待の深刻度（表 19）

5段階評価では、「1-生命・身体・生活への影響や本人意思の無視等」が2人、「3-生命・身体・生活に著しい影響」が15人であった。

表 19 虐待の深刻度

	5-生命・身体・生活に関する重大な危険	4	3-生命・身体・生活に著しい影響	2	1-生命・身体・生活への影響や本人意思の無視等	合計
人数	0	0	15	0	2	17
構成割合 (%)	0.0	0.0	88.2	0	11.8	100.0

(8) 虐待者の状況

ア 年齢階級（表 20）

「30歳未満」が2人、「40～49歳」が1人、「50～59歳」が2人、60歳以上が1人であった。

表 20 年齢階級

	30歳未満	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳以上	不明	合計
人数	2	0	1	2	1	0	6
構成割合 (%)	33.3	0.0	16.7	33.3	16.7	0.0	100.0

イ 職名又は職種（表 21）

虐待者の職種は介護職が5人、施設長が1人であり、介護職の内訳は介護福祉士以外が3人、不明が2人であった。

表 21 職名又は職種

	介護職	看護職	管理職	施設長	経営者・開設者	その他・不明	合計
人数	5	0	0	1	0	0	6
構成割合 (%)	83.3	0.0	0.0	16.7	0.0	0.0	100.0

ウ 性別（表 22）

男性が4名、女性が2名であった。

表 22 性別

	男	女	不明	合計
人数	4	2	0	6
構成割合 (%)	66.7	33.3	0.0	100.0

2 養護者による高齢者虐待の対応状況等について

(1) 相談・通報件数（表 23）

平成30年度内に受け付けた養護者による高齢者虐待に関する相談・通報件数は244件であった。平成29年度は、260件であり、16件減少した。

表 23 相談・通報件数

	平成30年度	平成29年度	増減 (%)
件数	244件	260件	-16件 (-6.2%)

(2) 相談・通報者（表 24）

相談・通報者については、「介護支援専門員」が 80 人と最も多く、次いで「家族・親族」及び「警察」が各 35 人であった。（「その他」は地域包括支援センター、社会福祉協議会職員等）

表 24 相談・通報者（複数回答）

	介護支援専門員	介護保険事業所職員	医療機関従事者	近隣住民・知人	民生委員	被虐待者本人	家族・親族	虐待者自身	当該市町村行政職員	警察	その他	不明（匿名含む）	合計
人数	80	20	21	12	8	25	35	2	10	35	13	1	262
構成割合 (%)	30.5	7.6	8.0	4.6	3.1	9.5	13.4	0.8	3.8	13.4	5.0	0.4	100.0

(3) 事実確認の状況及び結果（表 25）

「事実確認調査を行った事例」は 242 件であり、「事実確認調査を行っていない事例」は 7 件であった。事実確認調査を行った事例のうち、「立入調査を行った事例」は 1 件であり、「訪問調査を行った事例」が 193 件、「関係者からの情報収集のみで調査を行った事例」が 48 件であった。

事実確認を行っていない事例の内訳は、「相談・通報を受理した段階で、明らかに虐待ではなく事実確認調査不要と判断した事例」が 5 件、「事実確認調査を予定している又は事実確認調査の可否を検討中の事例」が 2 件である。

表 25 事実確認の実施状況

事実確認の状況	件数	構成割合 (%)
事実確認調査を行った事例	242 (5)	97.2
立入調査以外の方法により調査を行った事例	241 (5)	(96.8)
訪問調査を行った事例	193 (4)	[77.5]
関係者からの情報収集のみで調査を行った事例	48 (1)	[19.3]
立入調査により調査を行った事例	1 (0)	(0.4)
警察が同行した事例	1 (0)	[0.4]
警察に援助要請したが同行はなかった事例	0 (0)	[0.0]
援助要請をしなかった事例	0 (0)	[0.0]
事実確認調査を行っていない事例	7	2.8
相談・通報を受理した段階で、明らかに虐待ではなく事実確認調査不要と判断した事例	5	(2.0)
相談・通報を受理し、後日、事実確認調査を予定している又は事実確認調査の可否を検討中の事例	2	(0.8)
合計	249 (5)	100.0

※カッコ内は平成 30 年度に事実確認を行ったもののうち平成 30 年度以前に相談・通報を受け付けたもの。

(4) 事実確認調査の結果（表 26）

事実確認調査を行った結果、市町村が、虐待を受けた又は受けたと判断した事例（以下「虐待判断事例」という。）は、141 件であった。

表 26 事実確認調査の結果

事実確認調査の結果	件数	構成割合 (%)
虐待を受けた又は受けたと受けたと判断した事例	141	58.3
虐待ではないと判断した事例	38	15.7
虐待の判断に至らなかった事例	63	26.0
合計	242	100.0

(5) 虐待の種別・類型

ア 虐待の種別（表 27）

虐待の種類では「身体的虐待」が 99 人と最も多く、次いで「心理的虐待」が 54 人、「経済的虐待」が 37 人、「介護等放棄」が 27 人であった。

表 27 虐待の種別（複数回答）

	身体的虐待	介護等放棄	心理的虐待	性的虐待	経済的虐待	合計	被虐待高齢者数
人数	99	27	54	0	37	217	147
構成割合 (%)	67.3	18.4	36.7	0.0	25.2	-	-

※ 1 人の被虐待高齢者に対し、複数の虐待の種別がある場合、それぞれの該当項目に重複して計上されるため、合計人数は被虐待高齢者数 147 と一致しない。

(注) 構成割合は、被虐待高齢者数に対するもの。

【参考 虐待の具体的な内容】

種別・類型	内容
身体的虐待	<ul style="list-style-type: none"> ・暴力的行為 ・強制的行為・乱暴な扱い ・威嚇 ・その他（身体的虐待）
介護・世話の放棄・放任 （ネグレクト）	<ul style="list-style-type: none"> ・希望・必要とする医療サービスの制限 ・希望・必要とする介護サービスの制限 ・生活援助全般を行わない ・水分・食事摂取の放任 ・入浴介助放棄 ・排泄介助放棄 ・劣悪な住環境で生活させる ・介護者が不在の場合がある ・その他（ネグレクト＝介護・世話の放棄・放任）

心理的虐待	<ul style="list-style-type: none"> ・暴言・威圧・侮辱・脅迫 ・無視・訴えの否定や拒否 ・嫌がらせ ・その他（心理的虐待）
経済的虐待	<ul style="list-style-type: none"> ・年金の取り上げ・預貯金の取り上げ ・必要な費用の不払い ・日常的な金銭を渡さない・使わせない ・預貯金・カード等の不当な使い込み ・預貯金・カード等の不当な支払強要 ・その他（経済的虐待）

イ 虐待の深刻度（表 28）

5段階評価では、「1-生命・身体・生活への影響や本人意思の無視等」が最も多く 52 人であった。一方、最も虐待の深刻度の高い「5-生命・身体・生活に関する重大な危険」は 14 人であった。

表 28 虐待の程度の深刻度

	5-生命・身体・生活に関する重大な危険	4	3-生命・身体・生活に著しい影響	2	1-生命・身体・生活への影響や本人意思の無視等	合計
人数	14	9	51	21	52	147
構成割合 (%)	9.5	6.1	34.7	14.3	35.4	100.0

(6) 被虐待高齢者の状況

ア 性別及び年齢（表 29、表 30）

性別では、「女性」が 112 人であり、「男性」が 35 人と、女性が全体の 4分の3を占めていた。年齢階層別には、「80～84 歳」が 38 人と最も多かった。

表 29 被虐待高齢者の性別

	男性	女性	合計
人数	35	112	147
構成割合 (%)	23.8	76.2	100.0

表 30 被虐待高齢者の年齢

	65～69 歳	70～74 歳	75～79 歳	80～84 歳	85～89 歳	90 歳以上	不明	合計
人数	12	19	32	38	23	23	0	147
構成割合 (%)	8.2	12.9	21.8	25.9	15.6	15.6	0.0	100.0

イ 要介護認定者数（表 31）

被虐待高齢者 147 人のうち、介護保険の利用申請を行い「認定済み」は 90 人であり、全体の 6 割が要介護認定者であった。

表 31 被虐待高齢者の要介護認定状況

	人 数	構成割合 (%)
未 申 請	53	36.1
申 請 中	2	1.4
認 定 済 み	90	61.2
認 定 非 該 当 (自 立)	1	0.7
不 明	1	0.7
計	147	100.0

ウ 要介護度及び認知症日常生活自立度（表 32、表 33）

要介護認定者 90 人における要介護度は、「要介護 3」が 21 人と最も多く、次いで「要介護 2」が 19 人、「要介護 4」が 13 人の順であった。また、要介護認定者における認知症高齢者の日常生活自立度「Ⅱ以上」は 60 人であり、全体の 6 割以上を占めた。

表 32 要介護認定者の要介護度

	人数	構成割合 (%)
要支援 1	10	11.1
要支援 2	9	10.0
要介護 1	12	13.3
要介護 2	19	21.1
要介護 3	21	23.3
要介護 4	13	14.4
要介護 5	6	6.7
不明	0	0.0
計	90	100.0
要介護 3 以上	40	44.4

表 33 認知症日常生活自立度

	人数	構成割合 (%)
自立又は認知症なし	15	16.7
自立度Ⅰ	15	16.7
自立度Ⅱ	33	36.7
自立度Ⅲ	19	21.1
自立度Ⅳ	7	7.8
自立度Ⅴ	1	1.1
認知症はあるが自立度不明	0	0.0
認知症の有無が不明	0	0.0
計	90	100.0
自立度Ⅱ以上 (※)	60	66.7

※自立度Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、認知症はあるが自立度不明の人数の合計

エ 要介護認定者の障害高齢者の日常生活自立度及び介護保険サービスの利用状況（表 34、表 35）

要介護認定者 90 人における障害高齢者の日常生活自立度（寝たきり度）は、「ランク A」が 37 人と最も多く、次いで「ランク J」が 24 人、「ランク B」が 20 人の順であった。また、介護保険サービスの利用状況は「介護サービスを受けている」が 72 人であり、全体の約 8 割を占めた。

表 34 日常生活自立度（寝たきり度）

ランク	人数	構成割合 (%)
自立	2	2.2
J	24	26.7
A	37	41.1
B	20	22.2
C	7	7.8
不明	0	0.0
計	90	100.0
A 以上	64	71.1

表 35 介護サービスの利用状況

	人数	構成割合 (%)
介護サービスを受けている	72	80.0
過去受けていたが判断時点では受けていない	9	10.0
過去も受けていない	9	10.0
計	90	100.0

オ 虐待者との同居・別居の状況（表 36）

「虐待者とのみ同居」が 74 人、「虐待者及び他家族と同居」が 63 人であり、全体の 9 割以上が虐待者
と同居であった。

表 36 被虐待高齢者と虐待者の同居の有無

	虐待者とのみ同居	虐待者及び他家族と同居	虐待者と別居	その他	不明	合計
人数	74	63	9	0	1	147
構成割合 (%)	50.3	42.9	6.1	0.0	0.7	100.0

カ 家族形態（表 37）

「未婚の子と同居」が 50 人と最も多く、次いで「配偶者と離別・死別等した子と同居」が 30 人、「夫
婦のみ世帯」が 25 人の順であった。

表 37 家族形態

	単独世帯	夫婦のみ世帯	未婚の子と同居	配偶者と離別・死別等した子と同居	子夫婦と同居	その他①	その他②	その他③	合計
人数	3	25	50	30	24	8	1	6	147
構成割合 (%)	2.0	17.0	34.0	20.4	16.3	5.4	0.7	4.1	100.0

※「未婚の子」とは、配偶者がいたことがない子を指す。

その他①…その他の親族と同居（子と同居せず、子以外の親族と同居している場合）

その他②…非親族と同居（二人以上の世帯員から成る世帯のうち、親族関係にない人がいる世帯）

その他③…その他（既婚の子も未婚の子も同居、本人が入所・入院、他の選択肢に該当しない場合）

キ 虐待者との関係（表 38）

被虐待高齢者からみた虐待者の続柄は、「息子」が 75 人と最も多く、次いで「夫」が 29 人、「娘」が
20 人の順であった。

なお、1 件の事例に対し虐待者が複数の場合があるため、虐待判断事例件数 141 件に対し虐待者人数
は 149 人であった。

表 38 虐待者の被虐待高齢者との続柄（複数回答）

	夫	妻	息子	娘	息子の配 偶者(嫁)	娘の配偶 者(婿)	兄弟姉妹	孫	その他	合 計
人 数	29	7	75	20	3	1	2	7	5	149
構成割合 (%)	19.5	4.7	50.3	13.4	2.0	0.7	1.3	4.7	3.4	100.0

ク 虐待者の年齢（表 39）

年齢階層は、「50～59 歳」が 49 人と最も多く、次いで「40～49 歳」が 24 人、「60～64 歳」、「70～74 歳」が各 14 人の順であった。

表 39 虐待者の年齢（被虐待者数ごとのカウントのため延べ人数）

	20 歳 未 満	20～ 29 歳	30～ 39 歳	40～ 49 歳	50～ 59 歳	60～ 64 歳	65～ 69 歳	70～ 74 歳	75～ 79 歳	80～ 84 歳	85～ 89 歳	90 歳 以 上	不明	合 計
人 数	1	3	6	24	49	14	13	14	7	7	8	1	2	149
割合 (%)	0.7	2.0	4.0	16.1	32.9	9.4	8.7	9.4	4.7	4.7	5.4	0.7	1.3	100

(7) 虐待への対応策

ア 分離の有無（表 40）

虐待への対応策として、「被虐待者の保護として虐待者からの分離を行った事例」は 62 人であった。一方、「被虐待者と虐待者を分離していない事例」は 68 人であった。

表 40 虐待への対応策としての分離の有無

分離の有無	人 数	構成割合 (%)
被虐待者の保護として虐待者からの分離を行った事例	62	28.3
被虐待者と虐待者を分離していない事例	68	31.1
現在対応について検討・調整中の事例	2	0.9
虐待判断時点で既に分離状態の事例（別居、入院入所等）	23	10.5
その他	64	29.2
合計	219	100.0

※平成 30 年度以前に相談・通報を受け付けたものを含むため、合計人数が被虐待高齢者数 147 人と一致しない。

イ 分離を行った事例の対応（表 41）

「契約による介護サービスの利用」が 20 人と最も多く、次いで「住まい・施設等の利用」が 13 人、「老人福祉法に基づくやむを得ない事由等による措置」が 11 人、「医療機関への一時入院」が 9 人の順であった。

表 41 分離を行った事例の内訳

分離を行った事例	人 数	構成割合 (%)	面会制限を行った事例(うち数)
契約による介護保険サービスの利用	20	32.3	1
老人福祉法に基づくやむを得ない事由等による措置	11	17.7	7
緊急一時保護	1	1.6	0

医療機関への一時入院	9	14.5	1
上記以外の住まい・施設等の利用	13	21.0	6
虐待者を分離（転居等）	5	8.1	0
その他	3	4.8	0
合計	62	100.0	15

ウ 分離していない事例における対応（表 42）

「養護者に対する助言・指導」が 47 人と最も多く、次いで「ケアプランを見直し」が 21 人であった。

表 42 分離していない事例の内訳（複数回答）

分離をしていない事例		人 数	構成割合 (%)
経過観察（見守り）		7	10.3
経過観察以外の対応	養護者に対する助言・指導	47	69.1
	養護者が介護負担軽減のための事業に参加	4	5.9
	被虐待者が新たに介護保険サービスを利用	4	5.9
	既に介護保険サービスを受けているが、ケアプランを見直し	21	30.9
	被虐待者が介護保険サービス以外のサービスを利用	3	4.4
	その他	12	17.6
合計（累計）		98	-
合計（人数）		68	

（注）構成割合は、分離していない事例における被虐待者 68 人に対するもの。

エ 成年後見制度及び日常生活自立支援事業の利用状況（表 43）

成年後見制度については、「利用開始済」が 12 人、「利用手続き中」が 2 人であり、これらを合わせた 14 人のうち、市町村長申立の事例は 5 人であった。一方、「日常生活自立支援事業利用開始」は 7 人であった。

表 43 成年後見制度及び日常生活自立支援事業の利用状況

成年後見制度の利用状況		人数
成年後見制度利用開始済		12
成年後見制度利用手続き中		2
(内数)	市町村長申立あり	5
	市町村長申立なし	9

日常生活自立支援事業利用状況	人数
日常生活自立支援事業利用開始	7

(8) 調査対象年度末日での状況（表 44）

平成 30 年度末日における対応状況は、「終結」が 135 人、「対応継続」が 84 人であり、全体の 6 割が終結となっている。（「対応継続」には、一定の対応を終了し経過観察を行っている事例を含む。）

表 44 対応状況の種類

	人 数	構成割合 (%)
対応継続	84	38.4
終結	135	61.6
合計	219	100.0

※平成 30 年度以前に相談・通報を受け付けたものを含むため、合計人数が被虐待高齢者数 147 人と一致しない。

3 虐待等による死亡事例の状況について（表 45）

平成 30 年度に把握した虐待等による死亡事例は 1 件であった。（養護者のネグレクトによる被養護者の致死）

表 45 死亡事例の概要

養護者の状況	・未婚の娘（50 代）
被養護者の状況	・女性（80 代） ・要介護 2 ・認知症高齢者の日常生活自立度Ⅲ ・日常生活自立度（寝たきり度）A

※平成 29 年度に発生、平成 30 年度に把握したもの。

4 市町村における高齢者虐待防止に関する体制整備等の状況について（表 46）

各市町村高齢者虐待防止のための平成 30 年度中における体制整備等については、次のとおり。

表 46 市町村における体制整備等に関する状況

取 組 事 項	実施済市町村数	実施率 (%)	《参考》 29 年度 実施済市町村数
対応の窓口となる部局の住民への周知	31	93.9	29
地域包括支援センター等の関係者へ的高齢者虐待に関する研修	25	75.8	26
講演会や市町村広報誌等による住民への啓発活動	24	72.7	26
居宅介護サービス事業者に法について周知	24	72.7	25
介護保険施設に法について周知	23	69.7	20
独自の対応マニュアル、業務指針、対応フロー図等の作成	28	84.8	27
「早期発見・見守りネットワーク」の構築への取組	27	81.8	26
「保健医療福祉サービス介入支援ネットワーク」の構築への取組	25	75.8	23
「関係専門機関介入支援ネットワーク」の構築への取組	17	51.5	15
成年後見制度の市町村長申立の体制強化	30	90.9	28
警察署長への援助要請等に関する警察担当者との協議	20	60.6	17
老人福祉法の措置に必要な居室確保のための関係機関との調整	26	78.8	26
虐待を行った養護者に対する相談、指導または助言	31	93.9	30
日常生活に支障がありながら、必要な福祉・保健医療サービスを利用していない高齢者の権利利益の擁護を図るための早期発見の取組や相談等	30	90.9	32